



ミャンマーの僧院学校

やぎさわ かつまさ
八木沢 克昌

●公益社団法人シャンティ国際ボランティア会・アジア地域ディレクター

国民の約9割が上座部仏教を信仰するミャンマー。男性は一生に一度出家するのが習慣という敬虔な仏教国。一般的な公教育とは別に、宗教省が管轄する僧院学校という仕組みがある。僧侶らが僧院付属の小学校等を運営するもので、教育省も承認している。

僧院学校は、ミャンマー全国で小中高合わせて1,500以上。基本的には信者からのお布施によって運営されている。授業料は無料だ。僧院学校に通う子どもたちは、地方の農村部などの貧困地域の貧困家庭の子どもたちが多く。僧院学校に、長引く内戦の影響による戦争孤児を受入れる孤児のための養育院を併設するところもある。僧院学校の歴史は、日本やタイ等の寺子屋教育の伝統に似ているといわれている。その歴史は、王朝時代まで遡るといわれている。現在のミャンマーは、暗記主義の知識偏重型の教育が多いために、仏教を中心とした倫理・道徳教育にも力を入れる僧院学校にわざわざ子どもたちを通わせるケースもあるという。

そんな僧院学校の一つ、同国中部のピイの郊外にあるジンジャンタウン僧院の付属学校を、このほど訪ねた。私たちシャンティ国際ボランティア会が建設を支援した小学校の校舎の建設状況を視察するためだ。

「ミンガラバー」（ミャンマー語で「こんにちは」）。大勢の子どもたちが両手を胸の前で合わせながら、元気なミャンマー式のあいさつで迎えて

くれた。顔には、ミャンマーの伝統的な顔料の白いタナカを塗っている。

子どもたちの足元をみると、約半分がはだしだった。制服を着る子どもたちは、4分の1に満たない。地域の貧しさが子どもたちの服装に現れていた。

この地域には以前から公立の小学校はない。同僧院の僧侶が子どもたちに勉強を教え始め、それが契機となって地域の信者である村人等が中心となって資金を出し合い、1999年に僧院学校が創設された。現在、小学生から中学生まで752人が学ぶ。ピイ県で最大規模の僧院学校だという。教師は22人で大半が女性。

敷地内と教室を回ってみると、どの教室も整然としていた。床はピカピカに磨き上げられていた。校庭にはゴミ一つ落ちていない。校長でもある住職のネインダさん（55）が子どもたちと毎日、一緒に掃除をしているからだという。

住職の一日は、朝4時に起床。4時半に托鉢。5時に朝食。6時～9時までは僧院に学ぶ25人の少年僧に仏法等を教える。10時には昼食のための托鉢。11時に昼食。12時～13時に休息。13時から16時まで少年僧への仏法指導。16時～18時は水浴びと掃除。18時～21時に読経と一日の振りかえりと会議。21時に就寝と朝から晩まで休む暇もない。上座部仏教の僧侶は、227の厳しい戒律を守り食事は一日に2回。午後は飲物以外の一切の食事や固形物を取ることはできない。僧侶は飲酒や妻帯



僧院学校の住職と子どもたち

や結婚は出来ない。厳しい戒律を守る僧侶の生活が信者の尊敬を集める。

ミャンマーでは「仏法僧」に、「親」、教師の「師」を加えた「仏法僧親師」が「五つの宝」とされている。仏教徒は仏像に手を合わせる時は「五つの宝」に手を合わせる。教師は、仏陀と同じく敬われる存在と教えられているのだという。僧侶であり教師を兼任する僧院学校に寄付が集まるのは篤い仏教の信仰が根底にある。

印象的だったのは、子どもたちが元気一杯で、表情が豊かだったことだ。ミャンマーでは僧侶や教師への尊敬の念が強く、子どもたちも学校の教室や教師の前では大人しくしていることが多いが、この雰囲気は少し違った。「楽しく学び、楽しく遊ぶこと。教師と子どもたちの触れあいを大切にしている」と語る住職の仏教を中心とする教育哲学と人柄の影響だろうか。

ミャンマー国内では長い軍政の負の歴史的遺産で、依然、公立の小学校が十分には整備されていない地域が多い。全国で小学校に未就学の子どもたちが就学年齢の約15パーセントと高い数字だ。ミャンマー教育省の最新の統計では小学校5年生を卒業するのは74パーセント。実際にピイ県では約50パーセント程度で中学校へ入学できるのも約50パーセントと極めて低い。

そんな状況下にある子どもたちの教育を支えるのが僧院学校だ。けっして裕福ではない地域住民が子どもたちの教育のためにお布施で教育を支え

る。ピイ県には私たちが支援する尼僧のドーワナティリさんが運営する戦争孤児等の養育施設があるが、ここでは全国から集まった少数民族の子どもたちが大半を占めて多民族の共生のモデルとして全国的に知られるようになった。

僧院学校は地方農村や少数民族の貧困層の子どもたちの教育の機会を提供する意味で極めて重要な意味を持っている。僧院学校がミャンマー国内の信者からのお布施で成り立っている意味は大きい。国際援助や政府の支援に依存し過ぎることなく地域社会で伝統的な仏教の価値観で支え合い持続的に運営されている事の意味も大きい。

仏教や寺院の社会的役割が希薄になりつつある日本の社会ではミャンマーの僧院学校に学ぶ事が多いのではないだろうか。子どもたちの教育の問題や社会の問題のために僧侶自らが行動する姿勢。日本の子どもたちの6人に1人が貧困を抱える日本。ミャンマーのような絶対的な貧困と日本のような相対的な貧困問題は、単純には比較は出来ない。しかし、仏教の慈悲の思想の社会化モデルとしても意義は大きい。僧院学校は、ミャンマーの子どもたちに希望を与えているだけでなく、周辺のタイやラオス、カンボジア等の仏教国や日本においてもその実践と存在から学ぶ意義は大きいと思わずにはいられない。